

〈特別企画「AJELの歩みを振り返る」〉

II 東日本座談会

- ・2018年1月6日(土) 13時30分～15時30分
- ・専修大学神田キャンパス
- ・登壇者(五十音順、敬称略): 今井圭子、遅野井茂雄、清水透、高橋均、野谷文昭
- ・オブザーバー: 落合一泰(理事長)、宮地隆廣(理事)
- ・司会・編集: 受田宏之

はじめに

落合: 1960年代のことだったと思いますが、社会学者のロナルド・ドーアが「ラテンアメリカニストはいるが、アジアニストはいない」という趣旨のことを言ったことがあります。確かに、フィリピン研究とインドネシア研究とタイ研究を高いレベルで兼業するのは、大変だろうと思います。その点、当時のイギリスの日本研究者の目には、ラテンアメリカは外縁のはっきりとした、言語的にも文化的にもまとまりがある地域のように見えたのでしょうか。実際、ラテンアメリカニストと呼ばれる研究者、そう自称する研究者が大勢いました。

他方、チリの作家ホセ・ドノソは、『ラテンアメリカ文学のブーム』の中で、1960年代までのラテンアメリカでは、文学者は自国の文化や文学、あるいはさらにパロキアルな地域のそれに関心を寄せていたと言っています。ラテンアメリカは、外から見ると、ドーアの言うように、ひとつのまとまった森のようですが、その森を内側から見れば、ドノソが語るように、一本一本の樹相や根のかたちの違いに目がとまるのが通例だったということなのでしょう。

それから約半世紀が経過しました。その間、ラテンアメリカには大きな変化がありました。各地域に政治経済的变化が見られましたし、ラテンアメリカ全体の歴史にも大きなうねりが生まれました。グローバル化が世界を覆うなか、ラテンアメリカへの見方やその捉え方も変遷してきました。研究者に世代交代があっただけでなく、研究環境や研究手段にも、さまざまな変化がありました。

本学会が1980年に創立されたとき、会員数は160人でした。それが去年2017年には、570数名を擁するまでになりました。創立初期からのベテラン会員の皆様のご努力のたまものと感謝にたえません。

こうしたことを踏まえ、ここで少し立ち止まり、いま本学会に所属する私たちはどのような意味で「ラテンアメリカニストである」と主張しているのかを、振り返ってもよいのではないかと考えました。本学会は、たとえばニカラグア研究やアンデス研究のような国単位ないし地域単位の研究を重ねる研究者が集まり、研究成果をさまざまな角度から学びあってラテンアメリカ全体の理解を目指す、「想像の共同体」的なアンブレラ学会である点に存在意義があるのでしょうか。あるいは、地域研究や理論研究の足場を固めながらラテンアメリカの外に出ていき、他地域の研究者と議論を交わし理論的貢献も目指すという、ラテンアメリカ地域研究を自身の学問のひとつのフェーズと認識する研究者の集まりなののでしょうか。両方を組み合わせていくのが地域研究者の存在意義なののでしょうか。選択はそれぞれの会員の問題関心に委ねられていると思います。

本日、登壇してくださる先生方の場合、専門研究の場がラテンアメリカの中で異なるだけでなく、理論面でも国際関係論、開発学、国際政治学、比較文学、歴史学など多岐にわたっています。そして、それぞれの分野で、ラテンアメリカという地域の枠を越えた発言や活動をなさってきた方々です。今日は、皆様にこれまでの経験を広く語っていただきながら、学会の初期の歴史も含め、考え方や情報を会員と広く共有する機会にさせていただければと考え、お集りいただきました。どうぞよろしく願いいたします。

自己紹介

野谷：現在の勤め先は名古屋外国語大学ですが、順番でいくと東京工科大学に1年、立教大学に18年、早稲田に3年、東大に5年いて定年を迎えました。その後名古屋外大に再就職して、5年目の今年で二度目の定年を迎えようとしています。専門は文学で、東京外国語大の大学院でスペインではなくラテンアメリカ文学をやったという意味では先駆と自負して



います。当時ロルカをやる人はいましたが、ラテンアメリカは商業や貿易のイメージと結びついてたせいでもあったからでしょう、文学は学部で先輩の鈴木恵子さんがメキシコ文学で卒論を書いたのが唯一の先例で、大学院はできて間もなかったし、ラテンアメリカ文学でやろうという人は他にはいませんでした。スペインはフランコ時代で、末期とはいえ検閲があったこともあり、興味を持てる面白い文学がほとんど生まれていなかった。フランコ批判などするとスペインに行けなくなると怖がっていた先生もいたくらいです。

後に自分が教員になってからラテンアメリカ文学を講じられる場所も存在せず、立教のラテンアメリカ研究所の社会人講座と非常勤を務めた大学を除くと、東大の文学部が最初で最後です。それまでは多くの人たち同様、専らスペイン語を担当していましたが、ラテンアメリカ文学を教えてほしいということで、初めて専門として教えることができたのが本郷に新設された現代文芸論でした。幸い、私が定年退職したあともラテンアメリカ文学は残り、今は柳原孝敦君が継いでくれています。

清水：今朝 NHK の医学番組を見ていたら、象の寿命は70年、人間の寿命は75年だそうで、今年でその寿命を迎える清水です。1968年の大学紛争の年から25年間東京外語大に勤めましたが、その間、外国語学部で地域研究をやる際の悩みを抱えつつけながら、ラテンアメリカ研究の教育・研究体制を整える努力だけはしたつもりです。既成のディシプリンと地域研究の関係

はどうあるべきか、学部教育、院ゼミをどう再編成するのか。そういったことを自分自身の問題としても悩んだ時代でした。

50歳の直前に学生部長に選出されかけまして、いやあ、それだけは避けたい、ということで外大を辞めました。フィールドワークを優先するためです。その後、獨協大学に3年、フェリス女学院大学に3年、慶應義塾大学に10年勤め、65歳で定年退職し、それから10年たったところです。

専門を聞かれるといつも困ります。この学会の体質や地域研究の在り方と直結する問題ですが、僕はディシプリンから自由なアウトサイダーでいい、その自由さの中にインターディシプリナリーな可能性があるというのが今の僕の考えです。40年近くにわたるフィールドワークを通じてゆきついた考えですが、ディシプリンがなければどうしようもない。しかしひとつのディシプリンに閉じこもっているかぎり、なかなか新しい発想は生まれてこない。外国語学部からスタートした地域研究者として、その自由さに強みを見出せる可能性があるのでは、とも考えています。一応、日本では歴史学系の学会、特にオーラル・ヒストリーの分野で、発言してきました。

今井：私は東大経済学部生の頃からラテンアメリカ研究に興味を持つようになりました。当時経済学部生の間では比較的アジアへの関心は高かったと思いますが、ラテンアメリカやアフリカに対する関心は低く、ラテンアメリカを研究対象に選ぶ学生は稀でした。

そんな状況のなか、私はラテンアメリカ研究を志すうえでは比較的恵まれた環境のもとで教育を受けることができました。東大の教養学部には国際関係論学科があり、地域研究の分科もできて、この分野



の知見が蓄積されつつありましたが、そこで教育研究をリードしておられた川田侃先生が、その後経済学部に移られました。そして私は経済学部で川田先生の演習を履修し、国際関係と地域性を踏まえた国際経済学を学ぶことになったのです。それがアジア経済研究所でラテンアメリカ研究を志す動機付けになりました。アジ研には学会の創設メンバーでもある山田睦男先生や石井章先生など、錚々たるラテンアメリカ研究のパイオニアがいらっしゃいました。そのような先生方に導かれながら、また増田義郎先生が中心になって組織されていたラテンアメリカ研究者の月例会にも入れていただき、ラテンアメリカ研究に取り組むことになりました。

1970年代初めには、アジ研からアルゼンチンに派遣されましたが、60、70年代というのは、ラテンアメリカにおけるラテンアメリカ研究が大きく躍動した時期で、ラテンアメリカ地域研究への一步を踏み出したばかりの私は、とても新鮮で啓発的な議論に接することができました。アジ研では17年間にわたってラテンアメリカ調査研究に携わり、その間豊富な現地調査の機会を得ることができました。

その後上智大学に移り、国際関係論の一科目として開発経済論を担当することになりました。当時上智は、国際関係論を、学部では副専攻、大学院では主専攻に位置付けていました。また上智にはイベロアメリカ研究所があり、それはおそらく日本の大学のなかでラテンアメリカ関連の資料が最も充実している研究所だと思います。外国語学部のなかにはスペイン語学科とポルトガル語学科があり、学部課程で語学とラテンアメリカ地域研究を履修し、さらに大学院で博士前期（修士）から博士後期（博士）課程までラテンアメリカ研究を専攻できる体制が整えられていました。

上智で26年間教鞭をとった後、獨協大学で今年度まで非常勤講師としてラテンアメリカ関連の授業科目を担当してきました。獨協もスペイン語教育やラテンアメリカ地域研究に力を入れており、振り返れば、恵まれた環境のなかで教育研究生活を送ることができたと思います。

高橋：登壇者の中では最年少の高橋均です。生まれ年は1954年です。「旧」ゴジラの制作年ですね。出身は東京大学の国際関係論で、当時は衛藤瀋吉教授や公文俊平教授など恐れ多い先生方がいました。そこで開発途上国研究をやりたいという志望をいただき、第6回の日墨交換留学に応募したところ受かり、どっぷりラテンアメリカにはまることになりました。



帰国後に指導教官になっていただいたのは、アメリカ史の専門家であり主にニューディールを研究なさっていた新川健三郎先生でしたが、実際は増田義郎先生の研究室に入り浸っていました。当時の増田先生の所属は文化人類学ですから、国際関係論の学生の私はつけなかったわけです。その頃、駒場には第一研究室という建物がありました。4つあった寮の一番南の棟を無理やり改造して研究棟にしていたのです。窪地に建っている建物で、増田先生の研究室がある一階はとにかく湿気がひどい。そこに増田先生がぎっしり本を詰め込んでおられて、これがちょっと油断するとかびるのです。これを防ぐために乾燥機がいつも運転中なのですが、そのガーガーという騒音の中で本を選んで借りて読むということをしていました。

その後、1980年に教養学部に中南米科というものができ、82年に最初の学生の飯島みどりさんと今は亡き石井康史さんが入ってきます。この同じ年に助手として採用されました。博士課程を2年終えたところで来いといわれたのですが、そのまま6年間、助手をしました。その後、立正大学の経済学部で怪しげなアメリカ経済史を6年間教えました。94年に東大に戻り、今に至ります。この3月で東大を辞めて、東京外国語大学に移ることになっています。歴史学をやっています。

遅野井：私は、この中では高橋先生に次いで2番目に若いのですが、65歳を過ぎ、この3月で筑波大学を定年となります。先生方の中では、地域研究

という名を冠した研究科で学んだのは私だけじゃないかと思います。先ほどディシプリンの話ができましたけれど、地域研究を看板に掲げて研究生活を送ってきたわけで、「地域研究概論」を大学院で教えたりました。



筑波大学の大学院地域研究研究科の第1期生です。1975年、学際性を掲げた新構想大学として筑波大学が誕生して2年経った年の入学でした。文科省の設置審の関係からか、入試もかなり遅れて行われ、授業も1年間は東京教育大のキャンパスで受けた記憶があります。未だラテンアメリカがコースとして立ち上がっておらず、アメリカコースの下でラテンアメリカ研究を始めたという感じでした。ちょうど東京外国語大から中川文雄先生が移られて来て、その年の秋でしたか、細野昭雄先生がECLAから、そのあと山田睦男先生がアジア経済研究研から移られて、筑波大学のラテンアメリカ研究の体制が整いました。しばらくしてラテンアメリカ特別プロジェクトが立ち上がり、畑恵子さんなどが加わるという感じでした。

ラテンアメリカ学会が設立されたのが1980年、外務省の中南米局ができたのが79年だと思いますが、日本においてラテンアメリカ研究を推進しようという機運と恵まれた環境の中で、学究生活をスタートすることができました。79年にアジ研に職を得、南山大学などを経て15年前に筑波大学に戻って、こんど定年を迎えることになりました。専門はラテンアメリカ地域研究と言いつけてきましたが、政治学を中心に、主にアンデス地域のことを論じてきたというのがこれまでの歩みです。

宮地：事務局担当理事で東京大学の宮地です。専門は政治学です。1976年生まれの41歳です。皆様のさまざまな経験を聞く機会を得て、嬉しく思います。

学会創設前のラテンアメリカ研究の状況

野谷：まず、こういう座談会やシンポジウムで話をするトップバッターをラテンアメリカ文学を専門とする人間が務めるというのは僕が知る限り初めてのことで、大げさに言えば歴史的快挙と言えます。日本では1970年代の末から1980年代にかけて翻訳紹介が盛んになり、ラテンアメリカ小説が脚光を浴びたおかげで、その社会的地位とともにこの学会における地位も上がったことをつくづく感じます。

かつて外国文学と言えば、仏文、英文といった「西欧列強」の文学が上位にあり、露文、独文がそれに続き、イタリア文学ですら格上の扱いなのに、スペイン、ポルトガルはほとんど蚊帳の外という感じでした。極端に言えば南欧文学は時代錯誤的と思われるにいたるのです。セルバンテスの『ドン・キホーテ』とロルカの『ジプシー歌集』といくつかの戯曲以外は殆ど光が当たらなかった。ましてラテンアメリカ文学となると、南欧文学の一部と見なされるありさまでした。ラテンアメリカ文学のブーム以前に、ガブリエラ・ミストラルやアストゥリアスがノーベル賞を受賞しているのですが、一過性のできごとで終わっています。ネルーダの場合もほぼ同じで、1973年のクーデターの殉教者として取りざたされた感があります。

以前にも語ったことですが、当時のラテンアメリカは、AALA すなわちアジア・アフリカ・ラテンアメリカの3点セットの一画をなして、いつも一緒に扱われていた。「抵抗の文学」や「証言の文学」といったレッテルを最初から貼られるのです。出版社側も先入観に基づき、そういう作品ばかり扱おうとするから、文学性の高い、面白い作品が見えていなかった。それこそ、ガルシア＝マルケスがアストゥリアスを茶化していうように、「汗と血と涙」の文学ばかりをよしとするような風潮がありました。つまり何を書くかが問題で、どう描くかは問題にならなかった。そうした美学的評価を、スペイン語の訳者ができなかったことも理由でしょう。アストゥリアスにしても、『緑の法王』がアメリカ帝国主義を批判する政治小説としてまず紹介されたきりで、文学的評価の高い『大統領閣下』や『グアテマラ伝説集』は

ずっとあとになってからであることがその証となっています。

私の入学当時の東京外語大学のスペイン語科では、文学が話題にのぼることは少なく、話題になってもそれはスペインの古典で、現代文学の話も殆ど出ないという状況でした。会田由さんと野々山ミチ子さんの共訳でカミロ・ホセ・セラの『蜂の巣』が白水社の「新しい世界の文学」シリーズに入っていることを教えてくれる先生もいませんでした。前身が語学系専門学校なので仕方のないところもありましたが、文学をやると変わり者とか外れ者とかいうレッテルを貼られるような雰囲気がありました。僕はそういう空気に戸惑う一方で、反発していたと思います。

先ほど清水さんがおっしゃったように、1968年秋に大学でストライキが始まりました。すると教師と学生の間に溝ができ、学生もまた分断されました。中には石を投げる連中もいたし、ゲバ棒を握ってデモに加わる連中もいた。私は状況を把握しようと集会に出たりもしましたが、暴力は嫌悪していましたし、大衆団交の全体主義的雰囲気にも馴染めず、大きな変化が起きていることは理解していましたが、のめり込むことも全くのノンポリでいることもできず、居所がないまま宙吊りになった気がしていました。おそらく同じようなことを感じていた同級生も何人かいてグループを作り話し合ったりしましたが、文学とは無関係だった。その意味では孤独でした。そのころ、機動隊の力でバリケードが撤去され、授業が再開されたのですが、どこかしら寂しい。それでも卒論を書こうと思い、題材はスペイン文学ではなくラテンアメリカ文学にしよう決めました。その方が面白いという直感がありました。当時キューバ研究会というのがあって、ゲバラやキューバ革命については彼らや中川文雄先生の訳で出た『ゲバラ日記』から情報を得たりもしましたが、どちらかと言えば横目で見ていました。自分がやりたいことはやはり文学なのだという思いを抱いていたものの、卒論を誰が担当してくれるのかという問題がありました。スペインの古典文学の長南実先生がついてくれると思ったら駄目で、ラテンアメリカということで当時「中南米事情」という今から見れば地域研究的なコースを担当されていた中川文雄先生にお願

いすることになったのです。

その頃に大学院ができて、企業への就職は全く考えていなかったの、進学したいと思い、いろいろ相談したものの誰も引き受けてくれない。教える人がいないし、出ても食べていけないからやめたほうがいいと言われたのです。それでも文学をやりたいということで、卒論ではエクアドルのホルヘ・イカサの『ワシプンゴ』という作品、ドノソに言わせれば古い小説であるインディヘニスモ小説を取り上げました。それしかテキストがなかったのです。だから文学的に扱えず、違和を感じながらも主に社会学的な観点から卒論もどきを書きあげました。

大学院ではネルーダをやりました。詩が素材です。71年に彼がノーベル文学賞を受賞して一時脚光を浴びたことも手伝い、方向性としては間違っていないと思いました。とはいえ、中川先生は政治が専門です。インディヘニスモということでペルーの作家、シロ・アレグリアの大部の『世界は広く無縁』を貸して下さったり、エクアドルに詳しいという早稲田の寿里順平先生を紹介して下さったりはしたのですが、文学に関しては情報がほとんどありませんでした。今みたいにネットで探すなんてことはできなかったわけです。どこに情報源があるかという、さっき話に出た上智の図書館ですね。あるいはアジ研に行ったり、神奈川大を訪ねたりと、ありそうなところを回ってみた。それも誰かが指導してくれるわけではなく、行ってはガサゴソ探すという状況でした。

でも、ご存知のように、ラテンアメリカ文学が次第に脚光を浴び始めるんですね。ドノソが先ほどの『ラテンアメリカ文学ブーム』の中で語っているように、ラテンアメリカには詩しかないと思われていたのですが、欧米からの情報によって、だんだん散文にも目が向いていきます。日本でも、ガルシア・マルケスの『百年の孤独』の翻訳が鼓直先生によって行われます。確か増田義郎先生がお土産に買ってきた原書を新潮社に持ち込み、訳者として白羽の矢が立ったのが鼓先生だったと聞いています。新潮社に埴陽子さんという女性の編集者がいて、彼女が担当することでラテンアメリカ文学の翻訳が

続いたという経緯があったようです。とはいえ 70 年代ですから、『百年の孤独』でさえ、一部の外国文学通にしか受け入れられなかったようです。また、今の水声社の前身の書肆風の薔薇が『アンデスの風叢書』としてラテンアメリカ文学叢書を出しています。どちらかという小品が多かったのですが、ともかくそれらが起爆剤になって、雑誌レベルで作品が取り上げられるようになります。一番活発だったのは、中央公論社から出ていた『海』という雑誌で、オクタビオ・パスとかフリオ・コルタサル、ガルシア・マルケスと、いろいろな特集をやっています。文芸誌が取り上げることによって、大江健三郎や筒井康隆、山口昌男ら作家、知識人たちが発言するようになりました。70 年代は「雑誌の時代」といえます。短編がいろいろ出て、その短編の作者が実は長編も書いていて 60 年代のブームを作ったのだと分かってきたのが 10 年遅れの 70 年代、しかも 70 年代後半なのです。

それ以降に大きかったのが、集英社の「世界の文学」というシリーズで、ラテンアメリカの大作が取り上げられました。僕の記憶では、ドノソの『夜のみだらな鳥』という作品が出たことに出版界がびっくりしたんです。編集者たちが「あれ読んだか」と噂をする。それを日本におけるブームの始まりと見てもいいでしょう。コルタサル、フエンテスも紹介されました。僕が関わったのはバルガス＝リヨサの『ラ・カテドラルでの対話』という長編ですけども、タイミングよくリヨサが日本に来たんですね。これは大きなインパクトをもたらしました。彼はまだ若かったし、ハンサムで背も高い。しかもその後、79 年の秋にボルヘスが来ました。ラテンアメリカの神話的な作家が目の前にいるわけです。寺山修司さんやフランス文学者の清水徹さんたちとのシンポジウムがあって、どんどん作家が近くなり、作品に対する関心が広まっていきました。その後パスも来日します。

80 年代に入ると集英社の「ラテンアメリカの文学」全 18 巻の刊行が、『族長の秋』を皮切りに始まります。ラテンアメリカ学会が誕生するのはその直前ですね。その中で翻訳者の活躍する場が増えます。といっても研究者というより、スペイン文学をやっていた人がスライドしてきた例が多かった。木

村榮一さん、萩内勝之さんらがそうで、そこにチリに留学した今井洋子さん、日墨交換留学組の安藤哲行さん、山蔭孝夫さん、蔭山昭子さん、杉山晃さんらが若手として加わります。私もデビューは70年代の終わりです。こと文学に関しては70年代終わりから80年代にかけて、関心はスペインからラテンアメリカへのシフトが見られました。

翻訳が出ることで書評や評論が書かれ、また大学紀要に論文が載るようになりましたが、研究者を統合する場がなく、日本イスパニヤ学会に会員として属しながら、そのスペイン指向に飽き足らない人たちに声を掛けてラテンアメリカ学会に入会させるという斡旋屋みたいなことをさせられたのが私でした。翻訳が注目されることで訳者の文章も読まれるようになり、ラテンアメリカ文学研究者という呼称もこのころから使われるようになったと思います。

清水：学会設立当時のラテンアメリカ研究の現状については、『年報』第1号で各分野の方々が整理をされています。僕なりの立場から、学会設立への機運が高まっていった背景についてお話します。やはり1959年のキューバ革命と62年のキューバ危機が大きかった。「移民の中南米」というイメージに変更を迫るものでした。当時の日本の政治状況も反映する形でキューバ革命に期待する、そこからラテンアメリカへの関心が高まっていったというのが一つ。逆に、キューバ危機を通じて、「危険で、冷戦とも無関係でない中南米」という形で中南米への関心が向いていったというのがもう一つ。

さらに、国際的な政治情勢との関連で、中南米の資源が注目され始めたことも無視できません。今の僕の問題関心からは想像もできないことですが、アジ研のプロジェクトで石油開発の問題にかかわった時期がありました。『ラテン・アメリカの石油と経済』（1970年）という本の中で書いた論文が実は僕の処女作でした。このプロジェクトが立ち上がった背景には、スエズ問題がありました。第3次中東戦争で、石油資源が日本に回ってこなくなるという危険。10万トン以上の大型タンカーを造って、ケーブタウン経由で中東の石油を公海上で精製し、東南アジアに売りながら余った分を日本に

持ってくるという大胆な構想があったのですが、それをやるよりはむしろ、中南米の資源に目を向けて太平洋経由で持ってくる方が効率的ではないか。そういう発想が通産省やアジ研の人たちから出てきたわけです。

メキシコやブラジル、ベネズエラの石油についての研究会がスタートするのが60年代末から70年代にかけてですが、民間企業も中南米の資源に急速に注目しはじめます。それと平行して、ジャーナリズムも目をむけてゆく。日経新聞にいた水野一さん、あるいは朝日の本多勝一さんや共同通信の伊高浩昭さん。中南米を専門とする記者が出てきて、そのおかげで新聞にもわずかながら中南米に関する記事が載るようになります。これら一連の経緯の原点を考えると、やはりキューバ革命とキューバ危機が大きかったと感じます。

それから、野谷さんのお話の中にもあった、中南米文学がスペイン文学からすると亜流であるといった見方。これは文学だけの問題ではありません。あの当時は、例えばアフリカ史の場合、旧イギリス植民地の問題はイギリスで研究すればいい、イギリスの文書を使えばいいという発想、ベトナム研究をやるにはフランスへ留学すればいいといった発想が、まだ根強かった時代です。ようやく僕たちの世代に入ってから、現場主義といいますが、アフリカ研究ならアフリカへ留学してフィールドワークをやる、ないしは現地の古文書を漁ることによって植民地主義と植民地社会の実態を明らかにしていく、といった動きが始まったと感じています。

このような観点から、学会発足当時のラテンアメリカ研究を振り返ってみますと、留学先をみても、アメリカへ留学してからラテンアメリカに出掛けていくわけです。極論するなら、アメリカにおけるラテンアメリカ研究の方法を身につける、そのような段階にあったといえるのではないのでしょうか。そういう中で落合さんのように現場へ入る方が出てくるわけですが、学会が発足した段階では、現場からの目というのはそれほど芽生えていたとは言えない。唯一例外として挙げられるのが1958年に始まる東大のアンデス調査で、そこから育っていった方々が現場から発信し始めます。

こうした面もふくめ、学会発足時の研究状況を大雑把に括れば、紹介の時

代といえます。これは決して、増田先生をはじめ当時の先生方を批判しているわけではありません。増田先生は、非常に幅広く紹介をされただけでなく、『大航海時代叢書』のような膨大な史料も遺されました。けれども、『大航海時代叢書』の原典をベースにしたような研究というのはまだみられない。そういうよい意味での紹介の時代だったという感じがしています。現場からの発信が増えていくのは、学会がスタートしてからだといえるのではないのでしょうか。

今井：社会科学についてみると、1964年にラテン・アメリカ政経学会が発足しています。当時の状況を考えると、経済分野では南北問題への関心が高まっていました。植民地政策が失敗し、その反省の上に立って、援助政策はいかにあるべきかを問う議論も盛り上がっていました。矢内原忠雄先生の台湾研究や植民地政策論への批判も出ていました。政治、経済、法律という個々の専門からではなく、学際的、総合的に発展途上国を捉えようという視点が影響力を持つようになります。先述の川田先生がハーバード大学に留学され、アメリカで発展してきた国際関係論を学んで戻って来られます。

そうしたなか、矢内原先生や川田先生などが中心になられ、東大教養学部教養学科の中に国際関係論分科が創設され、国際情勢や各地域の実態を学際的に学ぶ環境が整えられていきました。私は1963年に入学したのですが、教養課程の国際関係論は大変な人気科目で、数百人入るような教室が一杯になっていました。衛藤藩吉先生が、「国際関係論なんて外交官が華やかにパーティーをやるためのものだと思っているかもしれないが、シビアに考えてもらわなきゃ困る。国際関係論は実に広く、深い知見が必要とされる難しい学問なのだ」という意味のことをおっしゃっていました。その後、国際関係論に加えて、ソ連、中国、アメリカ、ヨーロッパ、そしてラテンアメリカを対象とする教育研究体制が整えられていきました。

東大に限らないのですが、1960年代から70年代にかけて、石井章先生や細野昭雄、国本伊代、山田睦男各先生など、国際関係論や地域研究を専攻さ

れ、ラテンアメリカ研究の分野に進まれる方々が輩出しています。

アジ研は1958年に発足しましたが、2年後にラテンアメリカとアフリカの調査部門ができています。私が在職していた70年代前半ですと、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン、チリの調査研究員が計7人ぐらいいて、2年間ほど現地に派遣されていました。当時大学には資金力がなく、高額な旅費のかかるラテンアメリカへ留学生や研究者を派遣するのはきわめて困難で、また日本やラテンアメリカ諸国政府による留学生奨学金も稀でした。そうした状況のなか、地域研究者に対して長期にわたって現地で学び、研究する機会を与えてきたアジ研の海外派遣制度は、日本におけるラテンアメリカ研究の発展に大きく貢献したと言えます。

それから上智ではイペロアメリカ研究所が1964年に創設され、1969年には国際関係論専攻の大学院教育がスタートしました。国際関係論の専門家とともに、アジアやラテンアメリカの地域研究者も国際関係論専攻の教授陣に加わり、国際関係論と地域研究が補い合うカリキュラムが編成されました。こうして上智におけるラテンアメリカ地域研究者養成の教育枠組が創られたわけです。

政治経済面でいうと、植民地政策への反省があり、賠償金の支払いから政府開発援助（ODA）へと政策が展開されるなか、他方では貿易立国日本としての資源獲得、さらには海外投資へと政策のニーズが拡大していきました。対象地域とされたのはまずアジアですが、新たなフロンティアとしてラテンアメリカも注目されるようになっていきます。アジ研では、設立当初、東畑精一所長のもと基礎的研究が重視されていましたが、その後次第に政策提言に結び付く実践的研究要請への対応も求められるようになっていきました。

高橋：1954年生まれのは私は、矢内原忠雄先生はもとより、川田侃先生すら直接に警咳に接したことはありません。以下も文字情報としてだけ知っていることです。清水先生の言及されたように、1958年に東京大学のアンデス地帯学術調査が始まります。泉靖一という大学者が始めたのですが、ここに

一番最初に参加するのが寺田和夫と増田義郎両先生です。どちらもお生まれは1928年です。増田先生の方は、1961年に『インカ帝国探検記』を出され、これがベストセラーになります。1964年には『古代アステカ王国』を中公新書からお出しになります。そして、1968年にメキシコ五輪があるのですが、増田先生の凄いところは、それに合わせて『メキシコ革命』という新書を書いてしまうところです。あの中公新書には非常に完備した文献目録が付いていて、私の学生時代はあの目録に書かれた文献を読んで終わってしまいました。

さらに徹底的であったのが、1971年に研究社から出た『新世界のユートピア』という、今は中公文庫に入っている本です。スペイン・ルネサンスのことが書いてあるのですが、こちらはルネサンスといったらイタリアやトマス・モアのことくらいしか思い浮かばないので、何が書いてあるのか分からない。文章は明晰であるのに、自分のこれまで知っている知識に何も絡んでこない。活字が目の前でカラカラと空回りする感じでした。

『メキシコ革命』の文献目録と『新世界のユートピア』に打たれ、この道に入ってしまったようなところがあります。増田先生はとにかく凄い人でした。

遅野井：補足すると、60年代にラテンアメリカで長期軍事政権ができたことと、ブラジルの奇跡は重要だったと思います。ラテンアメリカは、アメリカを意識しつつナショナリズムの下で独自の開発を進めようとしていた。一方、日本サイドは、オイルショック後の資源外交が課題でした。ラテンアメリカ各国の民族主義的な政権が進める開発に日本がいかに参画するか、官民の開発問題への関心は、ラテンアメリカ学会設立の背後にあって、大きな推進力として働いてきたと思います。

地域研究というのは、往々にして日本の国家プロジェクトと無縁ではありませんでした。特に中東の場合、資源ナショナリズムが強く、資源外交と結び付きながら中東研究が発展してきました。梅棹忠夫さんあたりが中心と

なった中東文化ミッションというのもありました。ラテンアメリカの場合も、ラテンアメリカの国々が進めてきた独自の開発のアプローチと日本の外交戦略とが結び付くような形で、研究が促されました。外務省はじめ政府からも働きかけがあり、また JICA や JETRO といった政府系援助機関も 70 年代に力を付けてきたわけです。そういう大きな環境の変化の中でラテンアメリカ学会が設立されたということを指摘しておきます。

学会設立の経緯

今井: ラテン・アメリカ政経学会は社会科学分野が主力でしたので、人文系の若手研究者の間では研究成果を発表する場が欲しいという要望がありました。増田先生を中心とするラテンアメリカ研究の月例会に若い研究者たちも参加されていたので。それが重要な要因の一つとなって学会発足につながっていったと思います。

野谷: 増田先生が中心となって学士会館分館で開かれていた研究会ですが、今は亡き加藤薫さんあたりが一生懸命下働きをやっていたのを覚えています。私は一、二度紛れ込んだだけですが、ジャンル横断的な研究会で、それを広げる形でこの学会ができたのだと私も思います。また、先ほどの今井さんや高橋さんのお話にもありましたが、研究者には東大で学んだ人たちが多かったですね。ここにはおられません、国本伊代さんも外大から東大の院に進学した方ですし、加茂雄三さんも東大ですね。彼らのようなアメリカ研究から言わばはみ出た人たちとスペイン文学からはみ出た私は結構相性がよかったです。増田先生だって元は英文出身ですし。

それで勧められて学会に入り、スペイン語文学関係者に声を掛けたのですが、正直に言うとなかなかまとまりませんでした。関東と関西では距離があり過ぎ、研究会がないとか、やっていることもばらばらであるといったことが原因です。また文学をやる人には私みたいな一匹狼が多く、まとめにくいのです。

清水：学会が始まる前段階の研究会とは「ラテンアメリカ研究会」のことで、10年近くやっていたはずですが。増田義郎先生や中川文雄さん、加茂雄三、寿里順平さんあたりが中心となって、ゴードンの『*Political Economy of Latin America*』を輪読したり、学会報告というレベルではない研究報告をいろいろな方々がやりました。インターディシプリナリーな雰囲気は既に生まれはじめていた。ただ、学会設立時のこととなると、80年に僕はもうインディオ部落にのめり込み始めておりまして、学会の設立に直接かかわることはできませんでした。

野谷：皆さんご存じだと思いますけど、当初増田先生は学会を作ることに反対されていました。「研究会でいいじゃないか」ということをおっしゃっていました。それでも全体として機運が盛り上がっていたので、増田先生は要請を受け入れて初代理事長になられたわけですが、理論的にかっちりやるのではなくて、自由に楽しみながらやることを望まれていたようですね。

今井：ラテン・アメリカ政経学会が正式に発足する前は、歴史学を初めとして広く人文科学分野の研究者にも入ってもらおうという意見もあったようですが、最終的には社会科学分野の学会になりました。ラテンアメリカ研究の月例会はディシプリンをあまり限定しない開かれた会で、テキサス大学から国本先生、フロリダの大学から山田先生が帰国され、米国のラテンアメリカ学会動向を紹介されたりしていました。それも一つの要因となり、ラテンアメリカ研究の発表の場を設け、学術誌を定期的に発行する本格的な学会設立を求める声が大きくなっていきました。そして政経学会とは異なり、ラテンアメリカ学会の方は学際的研究者の学会をめざすということで、当初は人文、社会科学に加えて自然科学分野の研究者も加入しておられました。そして医学関係を中心に意欲的な学会報告もありましたが、残念ながらその後次第に自然科学分野の会員は減少していきました。それから学会は学会員間の交流と各機関の図書、資料の相互利用を促進するため、かなり早い時期から

ラテンアメリカ研究者名簿を作成し、主要機関のラテンアメリカ関連文献リストの作成、交換を働きかけてきました。

高橋：初代理事会のメンバーを板書しておきましたが、半分の方々は亡くなっておられます。学会設立当初のことを聞くのでしたら、この場にはいらっしゃる中川和彦先生や国本伊代先生がふさわしいことになります。今井先生、設立以前の月例会に参加されていたのは誰ですか。

今井：増田先生に、中川文雄、中川和彦、加茂雄三、山田睦男、国本伊代、石井章、清水透各先生。それから法学の佐藤明夫先生に、アルゼンチン留学から帰国された松下洋先生とマルタ先生、ブラジル法・社会論の福嶋正徳先生。それから当時大学院生でいらしたと思いますが、畑恵子さんなどが思い浮かびます。人文系の若手研究者の間では、研究成果を発表する場として学術誌発行への期待が大きかったと思います

他学会との関係

遅野井：先ほど名前が出た先生方は政経学会にも入っていたのですか。

今井：中川和彦、福嶋、清水先生と私を除いて未加入だったと思います。もっともアジ研が法人として加入していたので、その意味ではアジ研の研究者は間接的に加入していたとも言えます。

遅野井：ラテンアメリカ学会の設立には、地域研究とはどういうものかということが意識されていたと思います。だから人文地理や自然科学の分野の人たちも入っていました。筑波大の地域研究もその流れの中に誕生したわけです。

西向先生と大原先生の流れの政経学会と増田先生の流れのラテンアメリカ学会の間の問題点というのは、いろいろなところで目にしました。「両方に入るのはおかしい、どちらかにしなさい」「おまえは何々派だ」というよう

なことまで言われたものです。ですから、学会設立にあたって、政経学会を意識して、より学際性の強い地域研究というものを学問的に打ち立てるといような意識があったのではないかと考えています。私の個人的な印象かもしれませんが。

野谷：文学についていうと、学会ができたのがラテンアメリカ文学の評価の時期と重なっていたことは大きいと思います。国本さんに、文学関係者を入会させてもらえないかと囁かれた記憶があります。当時から日本イスペインヤ学会はあったのですが、スペインのことばかりで、あまり生き生きとしてなかったんですね。ラテンアメリカ学会の方は、新しい何かが開けそうにみえたのです。駆け出しの研究者として、所属する場所もなく、どこへ行けばいいか悩んでいるところにできたので、渡りに船というところがありました。

また、当時スペイン史学会というのもできて、それにも顔を出したのですが、やはりスペインのことばかりで、文学も自分の好みとは無関係にテーマを与えられ、歴史研究に利用されてしまうという感じがありました。例えば、「ホセ・マリア・デ・ペレーダをやれ」とか言われても正直言って文学として面白くないのです。19世紀のリアリズム文学なのですけど。だったらラテンアメリカのほうがずっと面白いということで、続けてきたところはあります。

今井：地域研究絡みですと、アジア政経学会というかなり大きな社会科学系の学会があります。それに対して、アフリカ学会の方は日本ラテンアメリカ学会に近く、学際的といえると思います。1990年には国際開発学会ができますが、これは面白い組織で、ディシプリンはオールラウンド、会員としてアカデミシャンだけでなく公務員や企業家、NGO職員なども加入しています。

環境やフェミニズム、貧困など、単一のディシプリンでは扱いきれない諸問題への注目が高まるなか、日本学術会議も新領域や総合領域というものを新たに設けることになります。私も一時期こうした新しい領域構想の会議に

出席していたのですが、そこで地域研究が科研費申請の新しい分野として設けられることになりました。それまで地域研究のような学際的研究は科研費に応募しにくかったようですが、変更後、地域研究が選考分野として認知され、応募しやすくなりました。

さらに地域研究者の側でも、単一地域ごと個別に研究するだけでなく、他地域の研究者と交流して共同研究を立ち上げ、地域研究の発信力を高めようと、地域研究会連絡協議会を組織しました。確か2000年前後だったと思います。その立ち上げの時、私は日本ラテンアメリカ学会の理事長をしていて、何回も会合に出かけていったのを覚えています。

援助関係だと、JICAでもラテンアメリカ、アジア、アフリカでどういう援助が求められているのか、そして対象国はどのような状況にあるのかといった問題を把握する必要性に迫られ、日本の本部決定主義から現地の意向重視主義へと次第にウエイトが移りつつありました。それに伴い、経済や法律といった個々の分野の専門家に対して、スペイン語やポルトガル語に習熟し、かつラテンアメリカ事情に詳しい人材が重用される傾向が見受けられます。それは専門調査員などにも当てはまる話かもしれません。

それから、地域研究会連絡協議会でアジアとラテンアメリカの共同シンポジウムをやったことがあります。挑戦的試みでしたが、残念ながら深いところで十分議論が噛み合わないとか、双方に重要な課題を設定するのに苦労したことを思い出します。

受田：清水先生、歴史系の学会と関わっているとおっしゃられていましたが。

清水：僕個人としては、メキシコでの3年間の留学で、はじめて本格的な歴史学の世界と接触することになりますが、当時の地域研究に感じていた同じ問題、つまり、上から目線で対象を分析するという問題に突き当たり、その後いろいろ考えた末に、落合さんの後を追うような形で村通いを始めるわけです。一年おきあるいは毎年、同じ村でのフィールドワークを続けるうち

に、いずれの既存のディシプリンからも自由になってゆく。歴史学や文化人類学からどう見られようと、書きたいと思う作品を書けばよい。

『コーラを聖なる水に変えた人々』（1984年）は、いわば学術的歴史学への決別宣言といった思いに支えられて出版した作品ですが、この作品をきっかけに、思いもかけず日本の歴史学界、特に歴史学研究会のメンバーからいろいろとお誘いを受けることとなります。なかでも国際関係論の斎藤孝、ドイツ史の西川正雄、フランス史の二宮宏之、柴田三千雄、イスラーム史の板垣雄三の諸先生、そして『エル・チチョンの怒り』（1988年）を出した研究グループには、大変お世話になりました。その関係で、歴研90年大会の総合部会報告を皮切りに、歴研創立60周年大会（1992年）、70周年大会（2002年）で報告、1987年、2005年のオーラル・ヒストリーのシンポでも発言の機会をいただきました。僕につづいて、ラテンアメリカ研究者が継続的に歴研の委員を引き受けることとなりますが、現在の編集委員長にブラジル史の鈴木茂さんが就任されたことは、歴研としては画期的なことと言えます。歴研以外では、2007年から日本オーラル・ヒストリー学会とかかわる一方、1993年の「宗教と社会学会」の創立にもかかわりました。こうした日本の学会とのかかわりを通じて、既成のディシプリンから自由であることが、むしろ学会にとっても意味があるということに確信を得た次第です。

高橋：私の場合、82年から88年まで助手をやっている間にずいぶん働かされて、学会というのはこんなに大変なものなのかとやや臆病になりました。歴史学研究会はいかに大変そうだと思って入りませんでした。鈴木茂先生などががんばっていらっしゃいます。加茂雄三先生は、西洋史学会で活動され、歴研には参加していません。一人ひとり限られた時間とスタミナしか持っていないわけですから、めいめいに応分の貢献をしていくものではないかと思います。

遅野井：今の若手研究者は、ラテンアメリカ学会のほかにディシプリン系の

学会に所属するのが一般的になっています。政治学の場合でしたら、比較政治学会であるとか。それはよい傾向だと思いますし、そうあるべきだと思っているのですが、最近の学会の研究発表を見ると、テーマがあまりに細分化されている、特定の狭いところに入ってきているようにも感じます。

そもそも地域研究は、学際性をうたっているわけで、既存の学問がたこつぼ化する、細分化される中で、むしろ新しい分野を切り開いて地域の課題と向き合う、欧米中心の既存の学問からの脱却を指向（学際性）してきたと思います。そうした統合的な志向を失わないで欲しいものです。地域研究がたこつぼ化するのはいはり問題なのであって、地域研究を基礎とした学会のありよう、研究の方向性について、もっと議論があつていいのではないかと日頃感じています。

教育と研究の関係

清水：インターディシプリナリーとは何かということとの関連で、僕が東京外国語大でやったカリキュラム改革と、結果としてどんな院生が育っていったかについてお話ししたいと思います。メキシコ留学から帰った翌年の1977年、文部省と交渉して中南米研究講座を新設し、僕はスペイン語講座から中南米講座へと所属が変わります。この講座に外国人教員1名も確保できました。

同時にカリキュラム改革を断行します。当時の外語大では、学部の1、2年は言語教育が中心で、スペイン語の授業が7コマありました。それを6コマに減らし、1コマ分をスペイン事情、中南米事情、スペイン語学事情、スペイン文学事情の4つに分けました。これら4つのうち2つを1、2年の間の選択必修という形で、日本語で聞ける事情講座を組み込んでいくという改革をしました。翌78年、ありがたいことに文部省がOKをだしてくれて、中南米事情講座の専任教員が2人に増え、僕と高橋正明さんの2人体制になります。

大学院についても、学部の講座改革と同じ1977年、大学院地域研究研究

科が発足します。それまでは僕が出た言語研究研究科しかなく、ここに初めてラテンアメリカ研究を大学院で学ぶ体制が整います。さらに1992年には、大学院地域文化研究科博士課程が創設され、外語の付置研究所のアジア・アフリカ言語文化研究所も合わせて、地域研究者を養成する体制が整うことになりました。高橋さんにつづいて、その後鈴木茂さんが専任として着任され、この3名の共同体制で、ゼミも共同ゼミという形で、院生を育てていくことになります。

僕の方針として、学部ゼミ生たちは極力外に出していました。これはディシプリンとの関係です。外語の学部だけを出てそのまま地域研究に入ってもらっては困る。ですから、一橋や東大には、学部ゼミ生が随分お世話になりました。そして、担当する僕たち自身も、別の大学から来た院生たちとどう付き合っていくかを学んだわけです。同時に、外へ出した院生、例えば一橋の社会学研究科に行った連中にも、外語の大学院ゼミに出ることを勧めました。正規の学生ではないけども、外へ出て行ってディシプリンを身に付けつつある院生を引きずり込んでゼミを活性化させるのです。時には、正規の大学院生よりもぐりの院生のほうが多いときもありました。

そんなインターカレッジな形で外語の血を常に新しくしていく。あらゆる専門の多様な院生を入れて、僕たちも成長していく。歴史、現代政治、思想、教育、宗教、音楽など、そして地域も時代も様々な院生を受け入れることによって、自分も幅広く勉強せざるを得なくなるのです。院生と議論をしながら、自分が作りたいと思う作品の下地を編んでいく。その一本一本の糸として院生を利用させていただくわけで、僕にとって意味のない院生には来て欲しくない、役立たないような院生報告はして欲しくないのです。こちらはこちらで真剣勝負なので、院ゼミは凄く厳しかったと思います。僕にとっても非常に厳しい刺激的な場でした。

その頃に院ゼミを通過していった人たちは、ラテンアメリカ研究者として今活躍しています。鈴木茂さんをはじめ、教育の江原裕美さん、牛田千鶴さん、青木利夫さん、メキシコ史の佐藤勘治さん、米墨関係史の中野達司さ

ん、マヤ史の初谷譲次さん、思想の林みどりさんや後藤雄介さん、ジャーナリストの工藤律子さん、宗教の大久保教宏さん、人類学の石橋純さんや音楽の千葉泉さんなど、バラエティーに富んでいます。それぞれが今、いろんな分野で活躍されていて、私自身彼らから学ばせてもらい育ててもらったと感じています。地域研究のための理想的な場だったと自負しています。ただ最近、外語から院生はわずかしか育っていません。せっかく場を作ったのに消えかけているというのは正直寂しいです。いずれにせよ、具体的な教育の場の改革をつうじて、そこからかなりの人々が巣立っていったのは、僕にとっては嬉しいことです。

今井：ディシプリンにウエイトを置くか地域にウエイトを置くかという問題に関して、『ラテンアメリカ研究年報』創刊号に、国本先生がアメリカの事情を紹介しておられます。60年代、多くの大学でラテンアメリカ研究のコースや学科が出来てくるのですが、ディシプリンを主としてラテンアメリカを副とするか、その逆かといった組み合わせが大学によっていろいろあったとのことです。テキサス大学は地域研究を主としていたのに対して、他のかなりの大学ではディシプリンを主としていたようです。

私が在職していたころの上智では、外国語学部で副専攻として国際関係論を学び、主専攻として各言語と各地域について学習していました。他方、大学院では、国際関係論を主専攻として履修し、学位は国際関係論の修士と博士を授与する制度になっており、先ほど申し上げたように、その国際関係論は地域研究と不可分の関係に位置付けられていました。その後10年程前に地域研究の分野が独立し、国際関係論専攻と地域研究専攻に分かれました。その結果、国際関係論専攻はよりディシプリン志向になり、学生には世界を対象とする社会科学分野のテーマが好まれる一方、地域研究では人文系の研究テーマが増える傾向がみられます。どれを主専攻にしてどれを副専攻にするか、そしてどのような学位を出すかという問題については、かつてアメリカの大学が苦慮したように、日本においても各大学で模索が続いています。

もう一つ、学術的な教育研究と実務的な教育研究のバランスについて付け加えさせていただきます。まずアメリカの場合、外交官や援助機関のスタッフ、企業関係者などにも修士や博士の学位取得者が日本に比べて多く、そのためラテンアメリカコース・プログラムにおいても実務教育の重要性はかなり広く認識されています。私がかつてジョージタウン大学の国際関係論専攻を訪れた時、電話帳のような分厚い就職先一覧名簿をみたことがあります。卒業生が多岐の分野にわたって就職していることが一目瞭然でした。大学院への進学は、その後の就職先や在籍中にどれだけ研究費が取れるかといった経済的な問題から大きな影響を受けます。それらについて見通しが得られなければ、落ち着いて研究することはできません。この問題にどう対処していくのか、これも学会にとって重大な課題となります。

高橋：私の直接には知らない時代の話をしませんが、1951年に東京大学教養学部の後期課程教養学科ができます。これは最初、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、以上4地域の「文化と社会」、国際関係論、科学史・科学哲学の6分科で発足しました。先ほども名前がでしたが、アメリカ科に中屋健一教授という怖い先生がいらっしゃいまして、山田陸男先生がこの人に鍛えられて育っています。国本伊代先生も、外語大を出たあとやはり中屋先生のもとで学んでいらっしゃいます。

その後、この6学科に加えて、文化人類学と人文地理学ができまして、前者に文学部英文科を出られた増田先生が就職します。その後、66年にロシアの文化と社会が、73年にアジアの文化と社会ができます。私はアジア科に進もうとかなり迷ったのですが、結局国際関係論に行きました。そして1980年、増田先生が文化人類学から教授として移ってきて、中南米の文化と社会ができます。同じ年に恒川恵市先生が助手に採用になり、翌年助教授に昇任、1982年に私が後任の助手として就任して3人でスタートということになりました。

大学院のレベルでは、1983年に大学院総合文化研究科が設置されます。

1996年の改革で、文系は超域文化科学専攻、地域文化研究専攻、国際社会科学専攻の3本立てになります。この地域文化研究専攻から多くのラテンアメリカ研究の後継者が育っているのですが、最近やや内部進学者が減り気味で、心配しているところです。

遅野井：筑波大学の場合、地域研究で学んでいる院生たちには、外務省の在外公館の専門調査員として現地に出て調査をするというルートが一時出来上がっていました。かつては修士課程から専門調査員になりました。専門調査員がある種のフィールド体験の役割を果たしていたといえます。現場重視、地域全体の把握、現代的あるいは実務的なものへの関心といったアプローチを取る研究者が筑波から育っていて、その数は学会の中でも30人から40人に達するのではないのでしょうか。いわば「筑波スクール」というような特徴を持った研究者が輩出したと考えています。独自の教育研究環境を筑波大は整えてきたということです。

もう1つ研究者の輩出に関して、ここ何年か、「グローバル人材育成事業」や「大学の世界展開力強化事業」など中南米に資金を振り向ける大型の学生交流プログラムが動いています。「世界展開力強化事業」は、3年前から全国で8プログラムが動いており、筑波大も私が中心になって運営しています。全体で5年間に10億円以上のお金が学生の交流事業に注がれることになっています。双方で学生を送り合うわけですが、学部生が早い段階で留学するだけでなく、筑波大では全分野から大学院生も多く参加していて、それによってラテンアメリカへの関心を深め、研究を進めたいという人材が育っていくのではないかと期待しております。

野谷：僕の場合、ラテンアメリカ研究あるいは地域研究に特化したような講座を持ったことはありません。あえて言うと、立教時代にラテンアメリカ研究所の所長を長らくやっていたのですが、そこで展開している公開講座に、ラテンアメリカの研究をやりたいということで外から入ってくる人たちは随

分いました。その中から文学研究者が何人も生まれています。今日の会場に顔の見える洲崎圭子さんもその一人です。それ以前にいた学生では内田兆史君や久野量一君、その後は石井 登君、仁平ふくみさんらが現在研究者になっています。早稲田では所属は教育学部で、後藤雄介君が同僚でしたがラテンアメリカ文学は根付いたとは言えず、むしろ出前講義を行った文学部で教えた見田悠子さんが研究者になっています。そのあと、東大で現代文芸論という新しい学科を立ち上げたときに呼ばれたのですが、そこではラテンアメリカ文学の研究者を随分育てました。駒場から進学してきてまだ何をやるか決まっていなかった人々を授業で刺激すると院に進学し、学振を取って留学する、さらに戻ってきて博論を書き、どこかに就職するというパターンが定着してきています。彼らはもともと文学をやる気ですから、我々の後の世代として、ラテンアメリカ文学を支えてくれるだろうと思います。このように既存の組織を利用したり、新しい組織を作ったりして、文学への関心を、あるいは映画とか音楽、絵画なども含む文化への興味を、若い世代の間に育むよう努めてきました。

学会活動全体に対する評価

野谷：論文の投稿が最近少ない傾向にありますね。それは当会に限ったことではなく、イスパニヤ学会などを見ても言えることです。デジタル時代になり、紙媒体が必要でなくなっているのかもしれませんが、投稿を呼び掛けでも増えないという問題。これはどちらかといえばマイナスの評価になるでしょう。

また、若手が早いうちからかなり翻訳を手掛けられる機会が増えました。ラテンアメリカ文学が受け入れられたことで、翻訳を出す出版社がかなり増えたんですね。昔だと、徒弟制じゃないけれど師匠的な人がいて、その下で下訳をやるという段階がありましたが、今は下訳者の段階を飛ばしてやっているような状況です。これは、紹介される作品の点数が増えるという点ではプラスとなる一方、質が伴わない翻訳が結構あるという点ではマイナスです。

また、東京スペイン語文学研究会という集まりができました。ラテンアメリカとスペインを隔てることなく若手研究者が集まって、それなりのレベルの発表が行われています。ラテンアメリカ学会に関わっている人たちも多く、文学に特化した場が欲しいということから生まれた研究会です。ただ学会ではないので、業績として発表や論文をどう評価するかという問題がありますが、イスパニヤ学会の紀要も含め、うまく両立すると思います。

清水：学会から遠ざかっているものですから、提言など申し上げる資格はありません。ただ研究条件が悪化している今、一つだけ述べておきたいことがあります。院生やオーバードクターの若手研究者たちは、大先生の大型プロジェクトの下請け的な研究をやらざるを得ないとか、ともかく苦労していると思うんです。毎回成果を出さねばならないという文科省の方針がありますよね。薄っぺらの論文でもいいから、ともかく数を集めなきゃどうしようもない。そこに院生たちも、多かれ少なかれ巻き込まれているはずです。本当に気の毒だと感じます。

そこから逃れて自由にやりたいことをやれよといっても、状況は厳しい。ただ一つだけ言わせえもらえば、本当に自分が惚れているテーマでこれだと思う作品を、論文を書けば、誰かがどこかで必ず見ている。これだけは確かです。それを信じて、雑用をこなしながら、いい作品を作っていく以外にない。誰かがいつかどこかで必ず見ていてくれる。それだけは若い方々にお伝えしたいと思います。

今井：当学会の歩みを振り返ると、まず会員数が4倍近くに増えたということで、研究者育成においてはかなりの成果をあげてきました。それから学会誌について、『ラテンアメリカ研究年報』が、現在まで数少ないラテンアメリカ関係の学術誌として刊行され続けてきたことの意義は大きいと言えます。そして学会のもう一つの目標であった国際交流においても、外国人研究者との共同研究、外国語での研究発表、外国研究者の招聘講演など、進展が

見られます。40年に満たない学会としては、十分評価できる活動を積み重ねてきたと思います。

それにもかかわらず、清水先生がおっしゃったように、若い世代を取り巻く研究環境の悪化は深刻な問題です。アジ研のような政府関係機関でも、かつては研究課題の設定に際して研究者の主体性が尊重され、業績評価において長期的視点から若手研究者を育てるという意識が根底にありました。ところが昨今、研究者にとって科研費など研究資金の獲得が半ば至上命令のようになり、短期間で研究成果が求められる傾向が強まっています。そのため共同研究を組織して、短期間で成果を出しやすい研究課題を設定する傾向も見受けられます。そうしたなか、若手研究者は、時として自らの研究課題とは異なる共同研究に参加せざるを得ない状況も生まれてきます。しかしそうしたなかでも、若手研究者の方々には自らの研究テーマをしっかりと見据え、自信をもって研究に取り組んで欲しいのです。そしてその積み重ねを一つの研究成果として結実させ、著作としてまとめあげることを目指していただきたいと願っています。

ラテンアメリカ研究が、一方で国のレベルから州、さらには市町村、村落レベルにまで下りてより緻密に分析されるようになったのは、地域研究の方向性として一つの進展だと思います。他方、グローバル化時代において、国、ラテンアメリカ地域、世界の中のラテンアメリカといったマクロ的な視点や、環境、平和、開発、ジェンダーといった学際的視点を欠いては考察できない領域の研究も重要です。環境については、最近小池洋一、田村梨花共編著で『抵抗と創造の森アマゾン：持続的な開発と民衆の運動』が出版されましたが、学際的な優れた共同研究だと思います。ミクロとマクロ双方の視点からの学際的研究が積み重ねられることによって、ラテンアメリカ研究はさらに深まり、面白くなっていくと思います。570人を超える会員を擁する当学会の今後に大いに期待したいと思います。

高橋：家庭の事情もあって、あまり学会活動をしていません。それでも、グ

ローバル化と地域研究の関係についていうと、両面あると思います。経済学でいうところの代替効果と所得効果みたいなものです。代替効果からいうと、ブラジルとかメキシコの直面している経済上の困難は、グローバル化が進展している中で、ひとしなみにいわゆる「中進国の罌」としてくくられてしまうようになります。相違よりはむしろ共通性が注目を集めるようになり、経済問題を考える上でメキシコの文化やブラジルの歴史をつつこんで研究する意義はどれほどあるか、という疑問が抱かれるようになります。グローバル化にはこういった画一化を促すような面があるわけです。

その反面、豊かになった所得効果として、ウェブを含め、地域の情報を集めるのがかつてとは比較にならないほど容易になりました。これは地域研究の可能性を広げるものです。私はグローバル化の全体的な効果について、やや楽観的な見通しを抱いております。

遅野井：学会が設立されて、そろそろ40周年。フィールドに出て1次資料を駆使して借り物でない研究をする研究者が増えてきており、日本のラテンアメリカ研究は着実に進んでいると思います。

要望があるとすれば、現代ラテンアメリカを課題とした先端型の大型科研は、まだ一度も採択されていません。試みはありましたが、何回かはねつけられています。ラテンアメリカに対する国家戦略というものがバックにないと、なかなか難しいのかなと思います。学会としても、採択されるよう力を入れて推し進めていただきたいというのが1つ。

もう1つは、財政の問題もあり、研究のリソースが限られる中で、各大学が持っているリソースを統合できないかということです。例えば筑波大はサンパウロ大学に地域拠点を立てていますが、そこを拠点に学会の会員が研究を進めるなど、文科省の事業採択などを通じて各大学が作り上げてきた研究交流のインフラを、学会として連携して活用することを考えられないかということです。競争的資金を求めて各大学が競い合うのは、あまりにロスが大きいと思います。過当競争の中でみな疲弊している。少ないリソースを、日

本のラテンアメリカ研究のために最大限活用することに取り組むべきなのです。

最後に、学会の運営ということで、私は2期理事長をやりました。その最初の年に学会事務センターの破綻の問題があって、約160名分の年会費を失いました。爪に火を灯すという言葉がありますけれど、会員の協力を得て危機的状況を何とか乗り切ったのです。当時と比べると、今は財政的に余裕があると思いますので、国際連携をはじめ、学会の発展のための事業に取り組んでもらえればと思います。

野谷：落合さんに質問ですけれど、ある時期にユニオンカタログを作るという動きがありました。あれはどうなったのでしょうか。

落合：日本のラテンアメリカ研究の成果総覧のようなカタログですね？方法論や財源なども含め、残念ながら、その議論は動いていないです。

さて、長時間のこの座談会も終わりが近づいてきました。本学会の理事長として、また聴衆のひとりとして、登壇された皆様に心からの感謝を申し上げます。その上で、この座談会で思い至ったことを、いくつか言葉にさせていただきます。

ひとつは、ムーブメント（運動）とインスティテューショナルライゼーション（制度化）の関係です。清水先生のような強い個性と意思を持つ方がなされてきたことは、ムーブメントの常なる喚起でした。しかし、そのムーブメントを維持発展させる場として、教育の現場をインスティテューショナルライズしなければならない。ですから、清水先生は教育・研究組織を改編する、教員を配置するなど、多くの仕事をこなしてこられたのだと私は理解しています。

しかし、その教員・研究者が他大学に移ると、残された者はムーブメントをどのように継承するかという問題に突き当たります。ムーブメントには属人性が強いですから、脱属人性を目指しながらムーブメントを維持するの

は、なかなか大変です。ですから、ムーブメントとインスティテューショナルイゼーションを往還しながら、組織を維持発展させなければなりません。遅野井先生が最後におっしゃった共同利用についても、どのようにしてインスティテューションをムーブメントの維持発展に利用していくかという問題に関係するのではないかと考えながら、うかがっておりました。

現理事長として認識している課題を申し上げますと、第1に学会の国際化という問題があります。個人として会員は、だれもが国際的な場で活動していますし、学生・院生の留学や調査派遣を後押ししています。しかし、学会そのものの国際化は十分とは言えないと感じてきました。昨年の定期大会では高橋百合子理事が中心となり、メキシコ政治学会のメンバーを招聘して複数のパネルを開きました。そうした学会同士の国際交流を広く維持発展させたいものですし、ラテン・アメリカ政経学会を中心とする韓国や中国のラテンアメリカ研究者との交流に、本学会としても関わっていいのではないかと思います。

いま、院生など若手の話を出しましたが、本学会の若手が海外の若手と切磋琢磨できるような場を設けるのも、本学会の重要な役割ではないかと考えます。海外の学会に本学会の若手を派遣したり、本学会に海外の若手研究者を招き、相互発表や研究交流を進めるという種まきをし、そこから将来的な共同研究に向かう人的関係も築いていくという努力が必要と思っています。遅野井先生がおっしゃったように、お金に少しゆとりのあるいま、そうした方面に投資できないかと考えています。

第2に、お金のあるなしとは別に、任意団体である本学会の将来像をどのように構想するかという問題があります。他の多くの学会が行ってきたように、本学会も法人化に向かうべきなのかは、十分に検討する価値があると思っています。法人格を持てば、寄付を得たり、一般向けの講座を組織して収入にしたりすることができるようになります。野谷先生がおっしゃったユニオンカタログ作成は、本学会のそうした基礎体力増強と結びついて初めて可能になるのではないかと思います。

そして、第3に、機関誌をいかに発展させていくかという課題があります。先ほど野谷先生が、投稿が少ないとおっしゃいました。現在の方式では、最初の構想から投稿を経て出版に至るまで、1年半ぐらいかかることもあります。もっと鮮度の高いうちに論文を出せるようなシステムを考えないと、潜在的な投稿者の後押しになりません。ある大学で私自身がかかわった経験なのですが、それまでは原稿が揃うのを待って編集作業を行い、紙媒体で600部を刷って全国の大学に郵送していた年報を電子媒体化した結果、原稿提出から早ければ2か月程度で論考を逐次公開でき、しかもアクセスが桁違いに高まったということがありました。本学会の研究活動に新しい風を送り込むためには、そうした大きな変化を検討する必要があるかもしれないと思っています。

今日は、温故知新という言葉を変えてかみしめる機会になりました。伺ったお話は、すべて、本学会のこれからの運営に反映されていくべきものと思います。昔のお話をたくさん聞かせていただいただけでなく、将来に向けたありがたいご提言をいろいろ頂戴いたしました。諸先生には、改めて深く御礼を申し上げます。